

安田女子大学紀要 49, 137-146 2021.

卒業論文の意義と指導

川 岸 克 己

The Significance and the teaching of the graduation thesis

Katsumi KAWAGISHI

日本文学科, 文学部,
安田女子大学

要 旨

本論は、卒業論文の目的について、これがどのように認識され、説明されているか、さらには、卒業論文がどのように指導されているか、等の現状を踏まえ、これを大学においてどのように指導すべきかについて問題を提起し、卒業論文指導書の内容、経済産業省の社会人基礎力や経団連の調査から見えてくる社会人として必要とされる汎用能力、そしてPBL（Project Based Learning）の検討によって、これを課題解決のための思考力と実行力の育成の教材として指導すべき、とする結論を主張するものである。

キーワード：卒業論文、卒業論文マニュアル、社会人基礎力、PBL、課題解決

1. 緒 言

本論は、卒業論文の目的について、これがどのように認識され、説明されているか、さらには、卒業論文がどのように指導されているか、等の現状を踏まえ、これを大学においてどのように指導すべきかについて問題を提起し、これを課題解決のための思考力と実行力の育成の教材として指導すべき、とする結論を主張するものである。

2. 背 景

2.1. 理想と現実の乖離

卒業論文は、大学の教育課程において、その最終学年で課される科目である。これは、卒業必修の場合もあるし、そうでない場合もある。卒業論文は、大学での学び（研究）の集大成と位置づけられ、作成する学生および指導する教員双方にとって、多くの時間と労力を必要とする。そうして書き上げられた卒業論文は、特別な科目の成果物として認識され、卒業してから自らの学び（研究）の唯一無二の成果物として学生本人ならびに教員に記憶されることになる。

一方で、卒業論文を学部学生に課することが妥当であるかどうかは、古くから議論¹⁾されても来

た。卒業論文も論文であると位置づけると、当然研究者における論文の定義²⁾に則ることになり、独創性や新規性、さらには論理的な整合性や厳密性など、然るべき内容や構成が求められる。しかし、学部4年間の教育の中で、4年間といっても基礎的な知識の習得や演習にも多くの時間と労力が費やされ、率直なところ、レポートを作成することはあっても、論文を執筆するのは卒業論文が初めての経験であり、十分な訓練がなされるわけではなく、けっして集大成とはいえないのが現状であろう。となると、論文としての要件を満たすには程遠くなり、本人の達成感や教員の評価も得られず、双方不完全燃焼のまま、卒業する、あるいは送り出すことになる。

2.2. 個人的な経験と認識

もちろん研究論文の定義にふさわしい研究を完成させ、学会で発表したり、専門誌に採録されたりと、学生本人も指導する教員も満足できる結果を得る場合も少なくないだろう。現在自分が担当するゼミにおいても卒業論文の指導を行っている。ある者は、実に興味深いテーマを選び、具体的な問題を提起し、独創的な仮説を提示し、丹念な情報収集と考察から見事に結論を導き出し、期日までに余裕を持って提出する者もいる。一方で、自分の興味のあるテーマを設定することもままならず、問題提起、仮説提示、検証論証ひとつひとつがうまく行かず遅れ、ときに励まされ、ときに厳しい指導に甘んじ、やっとの思いで期日までに提出する者もいる。かつて学生であった自分を振り返れば身につまされる思いであり、現在指導する側である自分は、これらの学生を卒業させてから、最善の指導はどうあるべきだったのか、毎年反省すること頻りである。

また、宇都宮〔他〕1967の「卒業論文のあり方」に、評価方法について、「研究の成果や学界への寄与の大小をもって採点すべきではなく、仕事のやり方、アプローチのしかた、考え方の態度などに重点をおいて評点すべきである」との意見が強かった」との言及があった。これは、毎年学生指導を通じて見えてくる卒業論文の理想とは異なる、指導側からの本音であろう。

3. 設 題

このような状況にあって、卒業論文の教育効果を実質化させるにはどうしたらよいか。まずは、学生と教師の双方において、卒業論文とは何かについて、改めて定義することが最優先である。そのうえで、学生と教員とがどのような心構えで取り組めばよいかを共有し、それにふさわしい指導を学生は求め、より効果的な技法を教師は指導するべきであろう。よって本論において、以下の通り問題を提起する。

設題：「卒業論文の意義をどう説明し、指導すべきか？」

4. 予 備 考 察

当然、多くの教員が同じような問題意識をもって様々な工夫を施しながら卒業論文指導にあたっているだろう。それでもなかなかうまく行かないのが現状である。となると、学生もまた同じような思いを抱いていると予想される。学生たちはより良い卒業論文を書こうとは思いますが、なかなか思うようには行かず、残念ながら納得の行く論文が書けないまま終わってしまうということも少なくないだろう。そうした状況に因應のかのように、数多くの卒業論文の執筆方法に関する

書籍が出版されている。

4.1. 卒業論文執筆指導書籍の目的と内容

Web上には、各大学、各学部、各学科、さらには各研究室や各ゼミ単位で、卒業論文の目的や書き方についてのページがアップロードされている。それぞれ特色があって、たいへん興味深い内容ばかりだが、対象者が限定的ゆえ、内容も多分に限定的である。そこで一般的な対象者のために書かれた書籍であるが、それらはどのような説明や指導をしているのか。

本論の背景や設題の視点からこれらの書籍を眺めると、卒業論文の意義についての記述が「まえがき」にあり、実際に研究、執筆するにはどうしたらよいかといった内容に多くの記述がなされている。卒業論文の意義については、学問の実践としての論文という位置づけと、これから社会に出ていくにあたっての有用な能力養成としての位置づけとに大別される。指導については、論文そのもののテーマ設定や文章構成、資料の集め方について概説しているものもあれば、それらをひとつひとつステップを踏んで進めていけるように懇切丁寧に書かれたものもある。

これらの指導書の立場を概観すると、学問を目的として、その実践手段として卒業論文を位置づけるのか、学問ではなく社会人教育を目的として、その借用手段として卒業論文を位置づけるのか、の違いとしてみることができる。これはたいへん大きな違いである。これを履き違えると、教員にとっても学生にとっても、求めるクオリティも指導方法もまったく噛み合わない不幸な結果に終わってしまう。

4.2. 学生の進路と卒業論文の目的の齟齬

卒業論文を書く学生は、なぜ卒業論文に取り組むのか。カリキュラムで卒業必修に決められていれば、否応なく取り組まなければならない。だから、カリキュラムで決められているから、というのが率直な理由であろう。しかし、将来研究者を志望するものであれば、そのような受け身な動機ではあってはならないし、実際もっと能動的に卒業論文に取り組むことだろう。問題は、将来研究者を目指すわけではない者、つまりその分野の研究論文を将来書く可能性が低い者の場合である。研究職ではなく、例えば一般企業等に就職を希望する者の場合、事情が異なってくる。指導する側は研究職であるから、論文を書くことがその職の責務でもある。となれば、これから何本も研究論文を書くことを前提として、卒業論文に取り組ませ、その視点から指導しがちである。しかし、学生が一般就職を希望する場合、そのような視点からの指導は求めている。論文執筆を通して、指導する側と指導される側に大きな齟齬が生じてしまうわけである。

4.3. 記述されていないもの

論文を書くという研究の実践を実利的に求めている者に過度の要求をするのは双方にとって不幸なことである。しかし、このような物言いには、さまざまな立場からの、さまざまな批判がぶつけられるであろうことは容易に想像できる。とは言え、現実問題として、学生に多大な時間と労力を求める卒業論文が、その学生にとって真に有意義な営為であってほしいというのは、教師にとっても学生本人にとっても同じ思いであろう。研究職を希望する者と希望しない者双方にとって、卒業論文の営為において、共通点はないだろうか。

卒業論文の指導書は、研究の実践である卒業論文はどのように書かれるべきか、その具体的な方法について、詳細に説明している。しかし、これでは研究のための指導書である。先に述べた

ように、学生の進路を考えると研究のためではない卒業論文指導書があつていい。となると、現在の、研究のための指導書に記述されていないもの、つまり、欠けているものがあるはずだ。それはなにか。

すなわち、これが社会に出てどのように役に立つのか、という見通しである。それが欠けている。学生にとっては、まさにそれこそが重大関心事なのに関わらず、である。よって、研究職を目指さない学生が圧倒的多数である以上、その学生たちに焦点を合わせた、卒業論文の定義とその説明、そして指導がなければならない。

5. 仮 説

よって、本論は、上記の予備調査と考察を踏まえて、以下の通り、仮説を提示する。

仮説：

主体的かつ創造的な汎用能力を有した職業者・生活者の育成を実現する実践的な教材として卒業論文を定義、説明し、研究者も包含する職業者あるいは生活者に求められる課題解決のための思考力と実行力の習得を目標として指導するべきである。

6. 論 証

6.1. 卒業論文指導書

卒業論文指導書は、どのように卒業論文というものを学生たちにどのように説明しようとしているのか。

参考文献にあげた卒業論文指導書の内容をつぶさに紹介し検討する紙幅はないので、これら出版されているものの一部ではあるが、その書名から内容の把握を試みると、以下のような語彙を示すことができる。

- ・ 書き方、ライティング、作成術、作成法、作法、基本、スキル、実践ポイント
- ・ まとめ方、スタイル、デザイン、研究の構築、組み立て方、構成
- ・ 考え方、思考を鍛える
- ・ ルールブック、手引、ハンドブック、入門、マニュアル、ガイドブック、アカデミック・スキルズ
- ・ テーマ設定、テーマ探し、テーマの発見、テーマ決め
- ・ 史料の扱い方
- ・ はじめての、これから、よくわかる、ゼロからわかる、若者のために、大学生のための、
- ・ 書くのが苦手、評価される
- ・ 教室、トレーニング、ワーク、メソッド、文章講座
- ・ マンガでやさしくわかる

卒業論文の書き方について、テーマの見つけ方、資料の探し方、組み立て方、考え方、そして書き方、と作成の順を追って書かれている。これらを細かいステップに分けて、ひとつひとつ確

認しながら進めていけるように指導するものが多い。かなり、実践的な方法、つまり、マニュアル的な要素が強いことが分かる。

しかし、これらの指導の基盤となる指導姿勢は、大きく2つに分けられる。つまり、研究の実践としての卒業論文を執筆するにあたり、研究とはなにか、論文とはなにか、といった学術研究のなかに卒業論文を位置づけるものと、卒業論文自体は将来直接役に立つわけではないが、間接的に何かの役に立つという説明をするもの、である。いわば、研究の視点からみた理想と現実である。

上記の視点から、卒業論文指導は、卒業論文の意義と指導の捉え方で、以下のように分類することができる。

参考文献としてあげた30冊程度の卒業論文指導書は、上記のいずれかに位置するが、実際にこれらを通読して言えることは、卒業論文の＜意義＞に関して言えば、「理想」から「現実」へのシフト、＜指導＞に関して言えば、「内容」から「作業」へのシフト、が見て取れる。すなわち、本来は【学術研究型】であるべき卒業論文であるが、その位置にとどまるのではなく、【研究実践型】、あるいは【課題解決型】を目指しつつ、最終的には【社会応用型】へと学生を導いていこうとする流れ、である。たとえば、「実は、レポート・論文を書く能力は、社会でさまざまな問題を解決しながら生き抜いていくために必要な能力と同じものが多いのです。」（桑田てるみ2013、p2）といった説明などである。

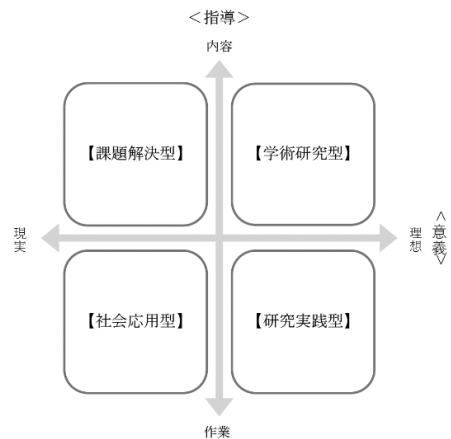


図 1

6.2. 社会人基礎力

卒業論文指導書は、研究とはなにかと正面から問うよりも、この卒業論文作成の体験から、何を学ばせるかという方向に実は意味があると感じているわけである。研究職を目指さない多くの学生たちのために、本来学術研究の実践的営為である論文作成をどう役立たせようというのか。もちろん、社会に出てから、ビジネスや社会活動、あるいは日常生活において役立たせてもらおうということになる。では、社会で活躍するためにはどのような能力が必要とされているのか。

6.2.1. 社会人基礎力

経済産業省は、社会人に求められる能力を「社会人基礎力」とし、「人生100年時代の社会人基礎力」とは、「これまで以上に長くなる個人の企業・組織・社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力」と定義³⁾、3つの能力と12の能力要素としてまとめている。

3の能力	1 2の能力要素
「前に踏み出す力」	①主体性、②働きかけ力、③実行力
「考え抜く力」	④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力
「チームで働く力」	⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、 ⑪規律性、⑫ストレスコントロール力

(経済産業省HPをもとに作成)

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年に提唱しました。」（経済産業省HPより）

「考え抜く力」の要素として挙げられている、④課題発見能力、⑤計画力、⑥創造力は、まさに卒論執筆には不可欠な力であるし、その前提として、「前に踏み出す力」の要素として挙げられている、①主体性、③実行力も必要不可欠である。「チームで働く力」の要素として挙げられている、⑩状況把握力は、資料やデータなどの情報収集能力、⑧傾聴力や⑨柔軟性は、自分と異なる見解に対して虚心坦懐に理解受容し、必要であれば自らの論を修正する力であろう。また、⑦発信力は論文として発表するための文章力、あるいはプレゼンテーション能力と言えるだろう。

こうしてみると、卒業論文を書くという行為は、社会人としての汎用能力を養成するために総合的な訓練として最適であることがわかる。

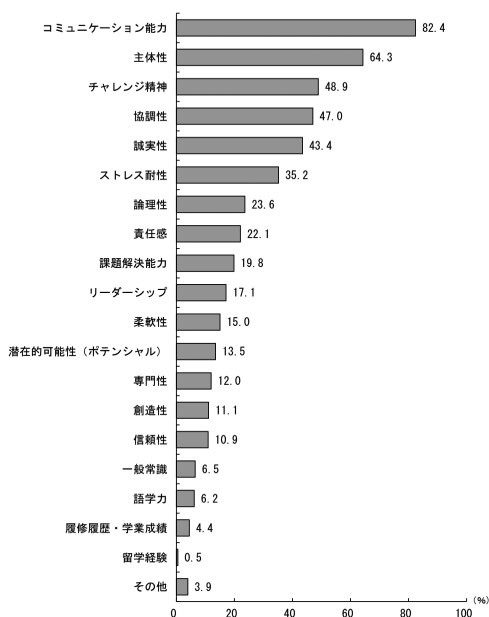
6.2.2. 経団連の調査

民間の経団連（経済団体連合会）の見方はどうか。以下の棒グラフは、経団連が定期的に調査⁴⁾している「新卒社員に求める能力」⁵⁾をまとめたものである。

基本的には経産省の主張と同じ結果であるが、経産省の社会人基礎力とは違った角度からの結果が得られおり、興味深い。たとえば、経団連のアンケートで上位に挙げられている能力のほとんどは、経産省の社会人基礎力として3つめに挙げられていた「チームで働く力」である。これをもっとも重要な能力であるとするのが経団連の調査結果である。

卒業論文は基本的に個人の活動であるが、実際に卒業論文を指導していて感じるのは、卒業論文を進めていく学生は、概して経団連がここにあげた能力が高い。つまり、指導教員との密なコミュニ

(参考) 選考にあたって特に重視した点（5つ選択）



(経団連HPより)

ケーション、進捗状況の報告や疑問点についての質問など活発にコミュニケーションを試みる。こうしたコミュニケーション能力を感じさせる学生には主体性を感じるし、同時に誠実性や責任感も感じる。何度となく繰り返される修正指示やいわゆるダメ出しにも屈しないストレス耐性も感じる。

職場ではこうしたチームで働く能力がもっとも重要視されているが、卒業論文で養成される能力とは一見無関係と感じられる。しかし、卒業論文を作成するに際して、指導教授からの指導、あるいはゼミの仲間との議論が得られるかどうかは、その成否に大きく関わる。この能力の必要性は卒業論文でも同様である。となると、卒業論文を書くことは、社会でも役に立つ、ということではなく、社会で役に立つ能力を、自分が専門として学んできた分野の知識を教材として、実践的に学ぶことができる場だと言えるだろう。

6.3. 問題解決型学習（PBL：Project Based Learning）

自ら考え、前に踏み出し、チームで連携し、発信する。これを教育現場で明示的に指導する方法がある。1900年初頭にアメリカの教育学者ジョン・デューイが提唱したPBL（Project Based Learning）である。PBLは、「課題解決型学習」と表現されることが多い。自分自身で課題を提起し、それを自らの思考と行動で解決する能力を習得することを目的とした学習法である。したがって、教師が知識や技術を教えるのではなく、学習者が主体的に考え行動するように構成されるのがPBLである。試行錯誤が伴うが、正しい答えに最短距離でたどり着くことを目的とせず、さらには正しい答えにたどり着くことも想定していない。PBLはそれがいかなるものであっても、答えにたどり着くまでの過程を重要視する。

PBLの具体的な過程は、まず解決したい課題を見出す。その課題に対して、予備調査を経て仮説を提示する。そして、この仮説を検証する。検証方法は何が有効か、ときに自ら考え、ときに相互に話し合い、仮説を検証する方法を考え出す。そのなかで情報を集めたり、論理的に考察したりする。そうして仮説を検証し、結果をまとめ、さらには発信する。これらを自らの力で行っていく。多大な時間と労力を必要とする壮大な学習法ではあるが、効果は絶大だろう。

これと対置されるのがSBL（Subject Based Learning）である。体系化され整理された知識を、効率よく整然と順番に学んでいく学習法である。さきの卒業論文指導書は、このSBLと言えるだろう。教員が卒業論文の意義と方法について順を追って説明する指導書を、論文を書いた覚えのある者が読むと、要点が簡潔にまとめてあり、ほんとうに有意義な指導書だと思わせるものがたくさんある。しかし、一方で、まだ一度も論文を書いたことのない者がこれらを読んで、はたしてなるほどこうやって書くのかと実感してくれるだろうかと思うと、少々心もとない。

PBLとSBLは、学習順序が真逆である。どちらも効果の得られる学習法であるが、卒業論文を書いてまとめる「内容」に価値を持たせるのではなく、卒業論文を書くという「行為」に価値をもたせる。これが卒業論文を指導するにあたって、卒業論文を書く意味を最大化させることのできる方法である。先の社会人に必要な力を、卒業論文を書くことによって体得することができるのである。そこには、専門知識と論理的な思考力だけでなく、むしろそれ以上に、調査、考察、執筆を計画的かつ効果的に進めていく経験から得られる実行力の大切さ、という学びがある。

7. 結 論

「卒業論文の意義をどう説明し、指導すべきか？」とする問題提起に対して、「主体的かつ創造的な汎用能力を有した職業者・生活者の育成を実現する実践的な教材として卒業論文を定義、説明し、研究者も包含する職業者あるいは生活者に求められる課題解決のための思考力と実行力の習得を目標として指導すべきである」とする仮説を提示した。卒業論文指導書、社会人に必要とされる汎用能力、そして社会人の汎用能力を養成するPBLの3点から、この仮説が妥当であることを論じた。

なぜ「課題解決のための思考力と実行力」なのか。なぜなら卒業論文は、大学での学びの集大成ではなく、むしろ逆で、社会人となるためのスタート地点において、いわば「社会汎用能力」トレーニングとして位置づけるべきものだからである。我々は社会人に必要とされる力を明確に意識しつつ、卒業論文を書くという行為の中で、思考力と実行力を学んでいく。教師は、これまでとは逆の認識を持って、卒業論文の指導にあたるのが望ましい、と結論する。

8. 課 題

これまでの卒論指導の意義とは逆の発送で卒論指導をするべきであるとの主張の延長線上には、ビジネススキルとのリンクが想定される。激動する世界と我々の社会に生起する様々な課題、巨大な課題に日々立ち向かうビジネスの世界で生み出してきたビジネススキルには、学生が卒業論文を書くにあたって、大いに役に立つスキルが含まれているであろう。そのスキルをより具体的に活用していける指導方法を模索していくことが次の課題である。

注

1. たとえば、「大学学部4年間の課程で卒業論文を課すことが果して適当かどうか。また適当であるとしてもどんな方法で実施すべきかといった点はわれわれ大学関係者が常に頭を痛める問題である。さらに卒業論文によってどのような教育効果を期待するのか。」(宇都宮敏男 [他] 1968) など。
2. たとえば、「先人の研究成果を正當に評価しつつ、何がしかの新しい知見を示して追加的貢献を行うことが論文の目的であり、学問の進歩をもたらすこと、そのためには、先人の研究成果と自己の意見をはっきりと区別することが必要であって、論文の中で、参考にした先人の業績を明示することが、如何に重要であるか (以下略)」(新堀2002) など。
3. <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
4. <https://www.keidanren.or.jp/policy/index09b.html>
5. <https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf>

参 考 文 献

<著書>

- 宮内克男 (編著) 『レポート・論文のまとめ方と書き方 増補版 保育・教育と看護・福祉のために』、川島書店、1969.11
- 斎藤清衛・田辺正男 『国語国文 レポートと卒業論文の方法』、右文書院、1970.04
- 佐藤孝一 『博士・修士・卒業論文の書き方』、同文館出版、1973.06
- 中村健一 『論文執筆ルールブック』、日本エディタースクール出版部、1988.05

- 木下是雄『レポートの組み立て方』、筑摩書房、1990.03
 ロン・フライ（著） 酒井一夫（訳）『アメリカ式論文の書き方』、東京図書、1994.02
 慶應義塾大学通信教育部（編）『卒業論文の手引 新版』、慶應通信、1995.09
 宮地裕・甲斐睦朗・野村雅昭・荻野綱男（編）『ハンドブック 論文・レポートの書き方』、明治書院、1997.04
 歴史科学協議会（編）『卒業論文を書く テーマ設定と史料の扱い方』、山川出版社、1997.05
 河野哲也『レポート・論文の書き方入門 第3版』、慶應義塾大学出版会、1997.08
 花井等・若松篤『論文の書き方マニュアル ステップ式リサーチ戦略のすすめ』、有斐閣、1997.12
 早稲田大学出版部（編）『卒論・ゼミ論の書き方 [第2版]』、早稲田大学出版部、2002.05
 酒井聡樹『これから論文を書く若者のために 究極の大改訂版』、共立出版、2002.05
 新堀總『評価される博士・修士卒業論文の書き方考え方』、同文館出版、2002.06
 戸田山和久『論文の教室 レポートから卒論まで』、日本放送出版協会、2002.11
 榎本伸明『卒論を書こう テーマ探しからスタイルまで 【第二版】』、三修社、2006.09
 佐藤望（編著）・湯川武・横山千晶・近藤明彦『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門』、慶應義塾大学出版会、2006.10
 細川英雄『論文作成デザイン テーマの発見から研究の構築へ』、東京図書、2008.04
 白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方 第2版』、ミネルヴァ書房、2008.05
 佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック ライティングの挑戦15週間』、ひつじ書房、2008.05
 川崎剛『社会科学系のための優秀論文作成術 プロの学術論文から卒論まで』、勁草書房、2010.04
 ノートルダム清心女子大学人間生活学科（編）『大学生のための研究ハンドブック よくわかるレポート・論文の書き方』、大学教育出版、2011.04
 石井一成『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』、ナツメ社、2011.04
 近江幸治『学術論文の作法 - [付] リサーチペーパー・小論文・答案の書き方 [第2版]』、成文堂、2011.12
 石黒圭『論文・レポートの基本』、日本実業出版社、2012.02
 戸田山和久『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』、日本放送出版協会、2012.08
 井下千子『思考を鍛えるレポート・論文作成法 [第3版]』、慶應義塾大学出版会、2013.02
 田中典子『はじめての論文：語用論的な視点で調査・研究する』、春風社、2013.04
 桑田てるみ（編）『学生のレポート・論文作成トレーニング 改訂版 スキルを学ぶ21のワーク』、実教出版、2013.09
 ボール・J・シルヴィア（著） 高橋さきの（訳）『できる研究者の論文作成メソッド 書き上げるための実践ポイント』、講談社、2016.12
 吉岡友治（著）『マンガでやさしくわかる 論文・レポートの書き方』、日本能率協会マネジメントセンター、2019.06
 郡司拓也『卒論の書き方 文章を書くのが苦手な大学生のための文章講座: テーマ決め・構成・まとめ方が例文ありでよくわかる』、Amazon Services International, Inc., 2020.02
 ジョン・デューイ（著）、宮原 誠一（翻訳）『学校と社会』岩波書店、1957年7月
 John Larmer, David Ross, John Mergendoller, "Project Based Learning (PBL) Starter Kit: To-the-Point Advice, Tools and Tips for Your First Project in Middle or High School", Buck Institute for Education, 2009/5/31・アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換、2014年10月
 『ディープ・アクティブラーニング』、2015年1月
 『PBL 学びの可能性をひらく授業づくり: 日常生活の問題から確かな学力を育成する』2017年9月
 福屋利信『大学教授よ、書を捨てよ、街へ出よう〜「プロジェクト型課題解決学習」(PBL) 進化論 〜』太陽出版、2020年4月

<論文>

- 宇都宮敏男、福島弘毅、許斐貢、三宅康友、清水司、中野義映「卒業論文のあり方」『電気学会雑誌』87(950)、電気学会、1967.11
 星野礼子、内海知子、中添和代、松村恵子「卒業論文作成の学習過程における学生の自己評価」『日本看護

研究学会雑誌』Vol.27 No.3、日本看護研究学会、2004

川田裕樹・備前嘉文「大学生が卒業研究およびゼミ活動を通しての学びをどのように捉えているか ―國學院大學人間開発学部 of ゼミ配属と卒業論文の制度・カリキュラムからの検討―」『國學院大學人間開発学研究』第10号、國學院大學、2019.02

曾禰元隆「卒業論文作成教育について ―論文の作成を通じての大学教育―」『工学教育 44巻1号』、日本工学教育協会、1996.01

<Web>

経済産業省 | 社会人基礎力 | <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>

日本経済団体連合会 | Policy (提言・報告書) | 定期調査結果 | 新卒採用に関するアンケート調査結果 | <https://www.keidanren.or.jp/policy/index09b.html>

[2020. 9. 17 受理]

コントリビューター：染岡 慎一 教授 (造形デザイン学科)